

特集 2

焼け野原から未来へ ～港と産業、暮らしを支えた 銚子の戦災復興～

1945 年（昭和 20 年）、戦火は千葉県内の都市に深い爪痕を残し、千葉市と銚子市の 2 都市が戦災復興の歩みをたどることとなりました。県都・千葉市に続き、本号では、もう一つの復興都市である銚子市に目を向けます。

戦前より港町として、また醤油醸造業を中心に栄えてきた銚子市は、戦災により市街地のみならず、産業や流通機能にも、大きな打撃を受けました。こうした状況のもとで進められた戦災復興都市計画と土地区画整理事業は、都市の再建にとどまらず、地域の暮らしと産業の再生を目的としたものでした。

本稿では、その歩みを通して、銚子市のまちづくりの原点をたどります。



■ 銚子と利根川の対岸である茨城県の波崎を結んでいた渡船場付近上空からの写真
現在の銚子市役所の位置にあった銚子醤油（現ヒゲタ醤油）工場や周囲の市街地が焼け野原となった。

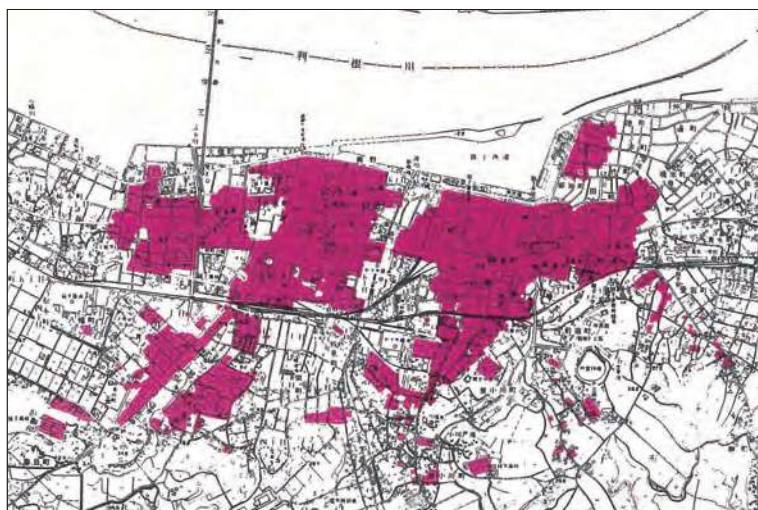
出典：銚子市役所

銚子空襲の記録

年月日と状況	昭和 20 年 3 月 9 日：東京大空襲後、不意の空襲 駅前通り・市役所を中心に 1,070 戸焼失 昭和 20 年 7 月 19 日：B-29 による大規模空襲 3,766 戸焼失 昭和 20 年 8 月 3 日：3 回目の空襲 内浜町付近にて 306 戸焼失
主な被災数値	被災面積：126 ヘクタール 死傷者数：約 1,200 人 焼失建物：5,142 戸（全戸数の 35.4%）

【空襲の状況詳細】

7月19日の空襲は、仙台空襲の報が入った矢先、B-29が海岸より侵入し、本城町や清川町など市の外郭部から中心部へ焼夷弾による攻撃が行われました。また、低空飛行による機銃掃射も行われ、忠霊塔や広場などに避難した市民から多くの死傷者が出ました。



■当時の罹災状況図（赤い部分が罹災した場所）
広範囲にわたり焼夷弾が投下されたことが分かる。

出典：『銚子戦災復興誌』 千葉県都市部昭和 57 年発行



■ 終戦半年後に米軍が撮影した空中写真(昭和21年2月13日)
白くなっている場所は、建物が焼失している。

出典：国土地理院ウェブサイト
地図空中写真閲覧サービス



戦災の爪痕と港湾の危機

終戦を目前にした、昭和 20 年に銚子市は 3 度の空襲により市街地に大きな被害を受け、多くの住宅や商業施設が焼失し、人々の生活基盤は失われました。

銚子は漁港と商業を基盤とする港町であり、市街地の被災は単なる都市機能の喪失にとどまらず、港灣を軸とした流通や産業活動にも直結する深刻な影響を及ぼしました。

戦後、地域の暮らしと産業をいかに再建するかが、大きな課題となりました。

復興土地区画整理事業の概要

戦災復興都市計画の策定

昭和 20 年 12 月 30 日、国の戦災地都市計画基本方針を受け、銚子市においても戦災復興都市計画が策定されました。この計画は、市街地の復旧にとどまらず、港町としての機能の再生と防災性の向上を重視したものでした。また、市街地と港湾との連携を意識したまちづくりが進められました。

この復興事業は単なる復旧の枠を超え、防災性の高いまちづくりと、水産・醤油産業を支える基盤整備を目的として実施されました。

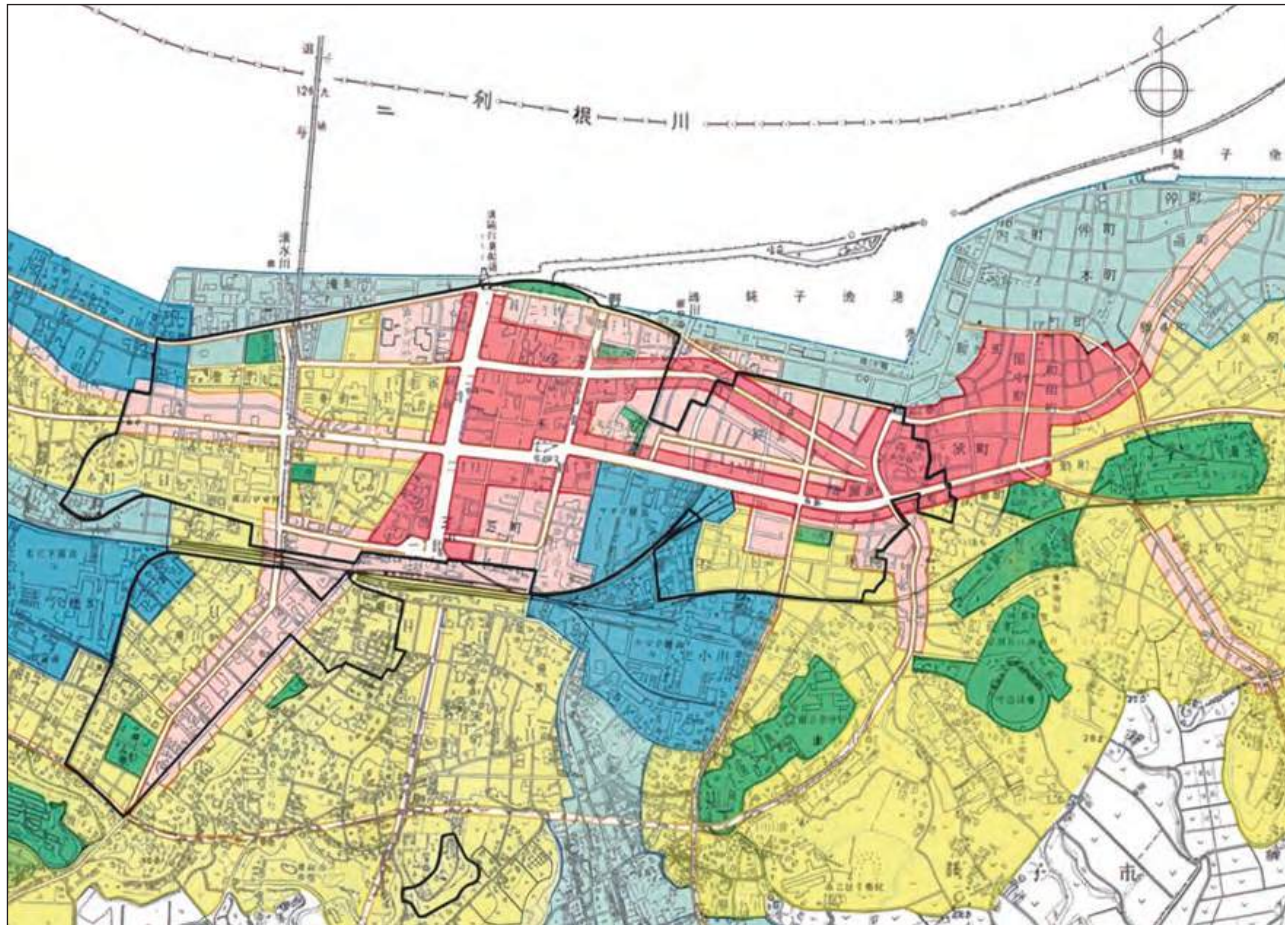
しかし、復興事業は決して順調なものではありませんでした。終戦直後の日本は、深刻な財政難や資材不足により、当初構想された全面的な整備が困難となりました。そのため、優先度の高い地域から段階的に整備を進める方針が採られ、こうした制約の中で生活と産業の回復を両立させることが求められました。

そのような状況のなかで、道路の拡幅や線形の変更、不整形な宅地の整理によって、火災時の延焼を防ぐとともに、公園や広場などの公共空間の確保も進められました。また、港・商業地・住宅地を結ぶ交通環境が整備され、生活と産業の両面を支える基盤づくりが推進されました。さらに、水産業や醤油産業の復興を支えるため、物流や土地利用の再編も進められ、戦災前の密集した街並みは、徐々に整理されていきました。

このように、産業と都市計画が一体となったまちづくりが行われ、防災性と利便性を兼ね備えた都市空間へと再生されました。これらの取り組みは、現在の都市計画にも通じる「防災性と機能性を両立したまちづくり」の先駆けと言えます。

事業概要

面積	144.3 ヘクタール (当初：279.3 ヘクタール)
認可	昭和 22 年 11 月 26 日
主な内容	道路拡幅、区画整理 交通・物流環境整備
目的	防災性向上 水産・醤油産業の基盤整理



■ 復興土地区画整理事業施行地区位置図

出典：『銚子戦災復興誌』千葉県都市部昭和 57 年発行

復興土地区画整理の事業計画

道路拡幅と区画整理により、細く入り組んだ市街地は、延焼防止の機能を備えるとともに、港や商業地を結ぶ物流動線としても機能する都市構造へと再編されました。

こうした変化は、現在の銚子市における道路配置や市街地形成の基盤となっています。

土地利用計画図



■ 主要幹線道路の幅員拡大、基盤の目に近い区画への整理や公園緑地の設置など復興土地区画整理設計図から読み取ることができる。

出典：『銚子戦災復興誌』千葉県都市部昭和 57 年発行

復興の歩みと成果

復興は段階的に進められ、道路や公共空間の整備が進むにつれて、市街地の機能は徐々に回復していきました。

商業施設や流通機能も次第に再生し、都市としての基盤は着実に再建されていきました。復興事業により整えられた道路や街区は、日常の暮らしを支えるとともに、防災面においても重要な役割を果たすこととなりました。

銚子駅前広場



■ 施行前の銚子駅と駅前広場の様子

出典：『銚子戦災復興誌』千葉県都市部昭和 57 年発行



■ 現在の銚子駅と駅前広場の様子

広幅員の道路と接続した駅前広場が整備され、交通結節点としての機能が向上している。

銚子駅前通り



■ 施行前の銚子駅前通りの様子

出典：『銚子戦災復興誌』千葉県都市部昭和 57 年発行



■ 現在の銚子駅前通りの様子

電線類の地中化が図られ、広い歩道を有した幅員 36m の道路が整備されたシンボルロードとして親しまれている。

旧市役所前通り



■ 施行前の旧市役所前通りの様子

出典：『銚子戦災復興誌』千葉県都市部昭和 57 年発行



■ 現在の旧市役所通り（県道 244 号外川港線）の様子
広幅員の道路が整備され、ゆとりのある街路空間が形成されている。

平和への誓い・未来への継承

昭和 59 年 9 月 14 日、銚子市は「非核・平和都市宣言」を行い、戦災の記憶を未来へとつなぐ取り組みを続けています。

銚子市内には、戦災の犠牲者を悼み、復興の歩みを後世に伝えるための記念碑が建立されています。



■ 末広町公園内に建立された戦災復興記念碑

銚子市は太平洋戦争も終わりに近い昭和 20 年 3 月 9 日、7 月 19 日及び 8 月 3 日と三度にわたる空襲に見舞われ、市街地の中心約 126 ヘクタールが焦土と化した。

その被害は、建物 5,142 戸、死傷者 1,200 人を数え、誠に悲惨な状況であった。同年 8 月 15 日、終戦となるや、政府は全国 120 余の戦災都市を対象に「戦災地復興計画基本方針」を定め、平和な文化都市の建設をめざした。

これに基き千葉県は、昭和 21 年 10 月銚子市と協力して土地区画整理事業による銚子市戦災復興計画を樹立した。その計画の柱は、防災を重視した市街地形成と交通網の整備であった。一方、市民も戦災の生活困窮にもめげず、郷土復興の意欲に燃えて立ち上がり、一致協力して文化都市づくりに邁進した。

その後、昭和 35 年 2 月、戦災復興土地区画整理区域 144.3 ヘクタールのうち、12.1 ヘクタールを飯沼都市改造土地区画整理区域として分離し、2 つの事業として、建物及び墓地の移転を行い、道路、公園等の公共施設の整備を実施した。

多難を極めたこの事業は、昭和 55 年 8 月に復興土地区画整理事業、昭和 57 年 4 月に飯沼都市改造土地区画整理事業がそれぞれ完成した。

ここに、銚子市の平和と発展を願い、市民及び関係機関が協力して完成させた事業の成果を永く後世に伝えるため、この地に記念碑を建立するものである。

昭和 57 年 11 月

■ 戦災復興記念碑に刻まれた碑文

現在への継承と平和の記憶

戦後の復興によって整えられた都市のかたちは、現在の銚子のまちづくりにも受け継がれています。港を中心とした都市構造や、生活を支える市街地は、今もなお地域の暮らしや産業を支える重要な基盤となっています。

また、戦災の記憶を後世に伝える取り組みも行われており、復興の歩みは平和の大切さとともに受け継がれています。銚子の戦災復興は、単なる都市の再建にとどまらず、地域の暮らしと産業を再び立ち上げた「まちづくりの原点」であったといえるでしょう。

焼け野原から立ち上がり、暮らしと産業を再生してきた復興の歩みは、現在の銚子の礎となっています。その経験と教訓は、これからのまちづくりにも活かされ、後世へと受け継いで行くことが求められます。